

ハイデー

(第二十五回)

津田芳雄譯

クララが一枚づつ葉つばをさし出してやるさ、
「ゆき」はこの新しいお友達の方へ、信じ切つた様子で頸をのばして来て、ゆつくりその手から葉つばを食べるのだつた。「ゆき」はいつもほかの大きな山羊たちにいぢめられるので、かうしてしばらくに落ちついて御馳走のいただけるのを喜んでゐる風だつた。クララはかうやつて、山の上になつたひさりで、小さな山羊に守られて坐つてゐるのが、もの珍らしくて愉たのしかつた。急に、今までのやうに何から何まで人にばかり頼つてゐないで、すべて自分の力でやつてのけ、人を助けてあげられるやうにまでなりたいと思つた。今まで考へたこともないいろんな考へが、次ぎから次ぎへこ起

つて来て、これからはずつこお日様と一緒に暮らしたいさか、今自分が山羊を喜ばせてやつてゐるやうに、こんな風に何かして、ほかの人を仕合せにしてあげたいさかいふやうなのぞみで、一ぱいになつた。前からあつたものまでが、急にパツパ美しく輝き出して、ものを見る目の角度が變つたかのやうに、今まで知らなかつた歡びが全身にみながり、クララは両手で小山羊の首を抱きしめて、叫んだ。

「ねえ『ゆき』ちゃん、お山の上はいいわねえ。あんなさ一緒に、あたしいつまでもここにゐたいわ」
ハイデーはお花畑に来てゐた。一目見るさ、歡びの聲をあげた。目の前には、一面にいそつづ

の花が金いろに輝き、その上には深々ままつ青な風鈴草が一むら波打つてゐた。日に照らされたお花畑いちめん、高い香氣がただよつてゐて、ハイディはそれを胸一ぱいに吸ひ込んだ。しかもそのにほひは、黄色い花の間にそこそこつつましく頭をもたげてゐる蔦色の小さい花が、一等よく放つてゐるのだつた。急にハイディはくるりさ後を向き、息せき切つてクララのゐる方へ駆けもきり、姿が見え出すや、大聲で叫んだ。

「ねえ、あんたもいらつしやいよ。お話ししてあげたつてわからないくらゐ、きれいなものよ。夕方にはしぼんでしまふわ。わたしがおんぶしてあげてゐるわ。ね、わたし大丈夫よ」

クララは首を振つた。

「まあ、ハイディつたら、何を云つてゐるの。あたしより小さいくせに。ほんまにあたし、歩けるさいいわねえ」

ハイディは何かいいこゝを思ひ付いたさ見え、しきりに何だかあたりを探しはじめた。

ペーテルはさつきから何時間さなく、上の方に坐り込んだまま、ぢつと二人を見下ろしてゐた。まだ自分の眼が信じられない氣がするのだつた。

あの病氣の子がもう來られなくなるやうに思つて、寝椅子をこわしたのに、しばらくするさ、ちやんさやつて來て、自分の鼻の先きで、ハイディを遊んでゐる。見まちがひではないかき、何度見なほして見ても、やつぱりたしかにあの子である。ハイディはやつとペーテルを見付け、きびしい聲で呟附けた。

「ペーテル、ここへ降りていらつしやい」
「いやだ」

「だつて、來てくれないさ、困るのよ。わたしひざりぢや、出來ないんだもの。早く來て手傳つてよ」
「そんなこゝろ、眞平だ」

ハイディは坂を少し駆けのぼつて行つて、怒つた眼をして、もう一度叫んだ。

「いいわよ、ペーテル。すぐ來てくれないなら、今に覺えていらつしやい、困つたつて知らないから。わたし、本氣だわよ」

さう云はれるさ、ペーテルは急にこわくなつて來た。誰にも知られたくないこゝろをしてゐるけれど、今までのこゝろは大丈夫だと思つてゐるのに、ハイディは今、まるで何もかも知つてゐるやうな口を利いたではないか。知つてゐれば、きつ

「おぢいさんに言ひつけるにきまつてゐる。ペーテルには、おぢいさんくらゐこわい人はない。あのおぢいさんが感付いたさしたら！ペーテルはこわくてたまらなくなり、立ち上つてハイデイの待つてゐるところまで降りて行つた。

「行くからさ、さつき云つたみたいなきこしちや、いやだぜ」

ペーテルがあんまりおさなくなつたのでハイデイは急に可哀さうになり一生懸命に受け合つた。

「大丈夫よ。きつこしやしなきこよ。さあ、一緒に来てよ。これから手傳つてもらふこも、ちつきもこわいきこぢやないのよ」

ハイデイもペーテルも二人がかりでクララの腕を片一方づつ持ち上げて、クララをかついで行かう云ふのである。二人は持ち上げるだけはすぐに持ち上げられたが、それから先きが大變だつた。クララは立つこさへ出来ないのに、それがさうして二人でかついでなんか行けよう。ハイデイが小さすぎるので、よりかかれないのだつた。

「わたしの首に手をかけてさう。それから、そつちの手はペーテルにかけて、そつちの方へしつかりさよつかかるのよ。そしたらかつげるわ」

けれきも、ペーテルは今までに人に腕をかしたこもが一度もないので、クララが腕をかけるさ、すぐだらりさ土偶ていこのやうに自分の腕をさげてしまふのだつた。

「さうぢやないわよ、ペーテル」

ハイデイは厳しく命令した。

「腕を輪のやうに曲げて、クララが手を通してよつかかれるやうにするのよ。さんなきこがあつても、腕の力を抜いちや駄目よ。かうすれば、きつさ大丈夫だと思ふわ」

ペーテルは云はれたさほりにしたけれき、それでも工合がわるかつた。クララは軽くはないし、三人の大きさが釣り合はないで、一方が高くて一方が低いから、そのよつかかりはさうもよろしくだつた。

クララはほんの少しでも自分の足を使つて見ようとして、その度びに、ちきに引込めた。

「ペン思ひ切つて、ぐん地面にくつつけてごらんさいよ。そのあさはきつさ樂だと思ふわ」
ハイデイがすすめた。

「さうかしら」

クララはこわく、ハイデイの云つたさほり、片

足をぐんぐん地面につけて見て、それからもう片一方を踏みしめた。ちよつと痛さうに叫んだけれき、もう一ミ足踏み出して、

「まあ、そんなに痛くないわ」

「うれしさうに云つた。」

「もう一ぺんやつてごらんなさいな」

ハイディははげました。

クララは一ミ足づつ、そろ／＼歩いてゐるが、突然大聲で叫び出した。

「出来てよ、ハイディ、ほら！ ほらまあ、あたりあたりまへに歩けるわ！」

ハイディは本人よりもつと嬉しさうに叫んだ。

「まあ、ほんたう？ほんたうに歩けるの？ひ

ごりでほんたうに歩けるの？まあうれしい！

おぢいさんがるればいいのにねえ」

それから、又うれしくてたまらないやうに叫びつづけた。

「歩けるやうになつたのねえ、クララちゃん、歩けるんだわねえ！」

クララはまだ二人の肩にしつかりさよりかかつてゐるが、一ミ足毎に足ざりもたしかになつて来て、三人にそれが手にさるやうに感じられるのだつた。ハイディは夢中になつて喜んだ。

「これからは、毎日一緒にここへのぼつて來られるのね。きこへだつて、行きたいところに行けるのね。これからずうつと、わたしとおんなじに、あんたも歩きまはれて、もう寝椅子なんかで押して行つてもらはなくてもいいんだわね。すつかり丈夫になつたんだわねえ。こんなうれしいことつて、ないわねえ！」

クララも心からさう思つた。お花畑はもうさう遠くなく、いそつづじの花がお日様に金いろに光つてゐるのが見えはじめた。風鈴草が咲きみだれ、地面が所々ぼつかりさ顔をのぞかせてゐるところまで來るさ、クララが

「ここです少し休んで行きませうよ」

と云つた。

三人は花に埋もれて坐つた。クララは生まれて初めて乾いた暖い山の草の上に坐つたのであるが、なんさもないいい氣持だつた。あたりにはいちめんに青い花がしづかに頭をなびかせ、向ふには金いろのえぞつづじや眞赤な矢車菊が色紙をひろげた様に輝き、あのいいにほひのする藍色の花やうつぼ草が、えもいはれぬ香りを放つてゐた。なにもかもが、ほんたうに美しかつた。ハイディはそばに坐りながら、何故今日は、お花がこ

んなにも美しいのかしら、ぢつと見てゐても、うれしさがこみ上げて来て叫び出したくなるのは、さうしてかしら、ご考へ、急に、ああ、クララが治つたからなのだわと思ひ出した。クララはあたりの美しさも、これから展けて来る幸福のさきめきに、うつさるゝなつて、ものも云へずに坐つてゐた。小さな心一つには、このさまぐのよろこびが、這入り切れない氣がした。

ペーテルも、さつきから花に埋もれて身動きもせず、口ひさつ利かすにおさなしくしてゐた。ぐつすり眠り込んでゐたのである。そよ風が後の岩の凹みから吹いて来て、高いしげみをさやめかせてゐた。ハイディは暖い日ざしの中に頭をそよがせてゐるお花を見るに、その一つ一つがここにあるのよりも美しくよいにほひがするやうな氣がして、又しても飛び出して行つては、そこここにうづくまつて、いちいち眺めたり鼻を押しあてて見たりするのだつた。

このやうにして知らぬ間に時が経ち、おひるはもうさつと過ぎてゐた。するに、「トルコ人」を先頭に、山羊たちの一隊が、まるで大使の一行のやうに、ぞろ／＼とお花畑の方へやつて来た。お花は山羊たちの好物ではなかつたから、御馳走を

食べに來たのではない。明らかにこれは、自分達をおいてきぼりにして、いつになく長い間歸つて來ない人間のお友達を、さがしにやつて來たのである。山羊さういふものは、不思議に間違ひなく時間を知つてゐるものなのである。「トルコ人」が花の間に三人の姿を見付けて一聲高く啼き立てるに、みんなも一齊に啼き聲をあげて、子供達もがけて駆せ跳んで來た。ペーテルはびつくりして目を覺まし、慌てて眼をこすつてゐた。あの寢椅子が、もこの通りちつともこわれなくて、立派な赤いおふさんまでつけて、おぢいさんの小屋の前においてあつた夢を見たのである。實際寢呆け眼には、眼の前いちめん、椅子に打ち込んだ眞鍮の光つた鉸が、頭を並べてゐるやうに思はれたのであるが、實はただのいそつじの黄色い花だつた。せつかく寢椅子がもこ通りになつて安心したと思つたら、あれはやつぱり夢だつたので、又もや恐ろしさもぎつて來た。ハイディは何もしないに約束はしたけれど、又ほかのさうしたはづみから、見付け出されないとも限らない。ペーテルは悄氣かへつておさなしくなり、ハイディの云ふことは何でもきき、不平ひさつこぼさずに、クララの歩くお手傳ひでも何でもした。

三人はもこのまゝに歸り、お辨當を食べることにした。ハイディは袋を取つて来て、さていよいよペーテルのお約束を果さうと思つた。さつきペーテルに、「今に覺えていらつしやい」云つたのは、實はお辨當のこゝだつたのである。來るさきおぢいさんが、いろんなおいしさうなものを入れてくれたので、ハイディはペーテルに澤山分けてやつて喜ばせようと思つてゐた。でもペーテルが、はじめさうしてもクララのつつかひ棒になつてくれなかつたから、「そんなことをいふなら、お辨當を分けてあげないわよ」さいふつもりで云つたのである。まゝころがペーテルは、脛に傷もつ身であるから、勝手にそれを「おぢいさんに云ひつけるぞ」さいふ意味に取つてしまつたのだつた。

ハイディはお辨當を開け、それを三つに分けた。みんなする分歩いたあまなので、こてもおいしくいただいた。それでもクララやハイディには多すぎたので、ペーテルはごつさり餘分の御馳走をもらひ、最後の一さかけまで食べてしまつたが、でもなんさなく、いつもほごおいしくなくて、何だかお腹の中に咬み付くものゝが、一ミロ毎にのまに引つかかるやうな氣がした。

おひるごはんがいつもより分おそかつたので、すむまもなく、おぢいさんが迎ひに来た。ハイディはその姿を見付けるま、まつ先きに今日のうれしいお話をしようま、飛んで行つた。でもあんまりうれしくつて、そばまで行き著いても、ものが云へなかつた。けれどもおぢいさんにはすぐ様子がわかつて、にこ／＼してクララのそばへ急いで行つた。

「おお、やつて見なかつたか、えらかつた、えらかつた、目出度い、目出度い」

それからクララを抱き起し、左手で背中を支へ、右手によつかからせて、少しばかり歩かせて見た。今度はこんな丈夫な腕に支へられてゐるので、クララは安心して切つて、顔へもおびえもせずに、平氣で歩いた。ペーテルは意氣揚々まそのそばを跳んであるま、おぢいさんもまるで自分に歡びが訪づれたやうに満足さうだつた。けれどもやがてクララを抱き上げ、

「あんまり度をすぎしてもいけませんわい。そろそろ引き揚げませうかな」

ま云つて、山道を下りはじめた。